

平成30年 5月27日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16699

研究課題名(和文) エリソンとヘミングウェイ スタイル論を支点にした交叉的読みの実践研究

研究課題名(英文) American Cultural Dynamics: Ellison, Hemingway, and Style

研究代表者

辻 秀雄 (Tsuji, Hideo)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：70571892

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：ラルフ・エリソンのアーカイブ調査に着想を得て、アーネスト・ヘミングウェイとエリソンの接点として1930年代に注目して研究を進めた。具体的には、スペインを舞台にしたヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』(1940)が実は1930年代ニューディール期の文化的関心を多分に反映している可能性を探求した。エリソンの未発表短編作品である「広場でのパーティー」とヘミングウェイの同小説がニューディール期の左派文化の中核的メッセージである反リンチにつながる問題意識を共有しているにととまらず、一見したところ全く無関係なアメリカ黒人のヴァナキュラーな特色が『誰がために鐘は鳴る』に見て取れることを検討するにいった。

研究成果の概要(英文)：Building on my archival research from which I observed that Ernest Hemingway's influence on Ralph Ellison was particularly heavy in the 1930s, I began to pay closer attention to the cultural significance of 1930s America on Ellison and Hemingway, especially on Hemingway's novel, *For Whom the Bell Tolls* (1940). The novel not only features one of the chief messages of 1930s left culture, a message of anti-lynching, it also foregrounds proletarians in the figures of Spanish guerillas in much the same manner as the cultural and literary works of 1930s America, the age of FDR's New Deal when cultural representations most prominently spotlighted the "people." Thus I have concluded that what Hemingway did in that novel can be more fully acknowledged when we compare it with the vernacular in the 1930s.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ヘミングウェイ ラルフ・エリソン スタイル ニューディール 誰がために鐘が鳴る ヴァナキュラ

1. 研究開始当初の背景

長編小説 *Invisible Man* (1952) によってアメリカ文学史上の重要作家と目される Ralph Ellison は、同時に膨大な量の文化論や文学論を残し、没年翌年の 1995 年に再編集されて出版された大部のエッセイ集は、多くの研究者の関心を引いてきた。人種という概念の自明性を疑いながらアフリカ系アメリカ文学研究を批判的に継承、発展してきた 90 年代後半以降の研究潮流に、必ずしも人種にとらわれないアメリカ文学の伝統に意識的であったエリソンのエッセイ群が恰好の素材となったからだ。

エリソンの文学論・文化論における語彙から特にスタイルという用語に着目する理由は、それが通常の「文体」以上の含意を持ちながら、エリソンを現代的視点から積極的に評価してきた Ross Posnock や Walton M. Muyumba といった研究者たちがそのことに注意を払ってこなかったからだ。例えば、1969 年発表のエッセイ、“Homage to Duke Ellington on His Birthday”において、エリソンは奇抜にもエリントンと Ernest Hemingway を並べ、二人が「芸術スタイルを通じて時の流れがもたらす荒廃に抗い、自分自身であり続ける力」を共有するという。音楽と文学という芸術媒体の相違および人種的差異を越えてエリントンとヘミングウェイをつなぎ、人種超越的な地平でアメリカ文化を定義するエリソン独自のスタイル理解が際立つ。まさにこうした次元におけるエリソンのスタイル理解に着目するのが本研究である。

エリソンとエリントンの関係に比べてエリソンとヘミングウェイの組み合わせにはそれほど自明のつながりがあるようには思われないかもしれないものの、両者の関係を論じた Brian Hochman らの先行研究が明らかにするように、実はエリソンは文体の革命家として名高いヘミングウェイの作品を手書きあるいはタイプによって書き写しながら丹念な精読を行い、自身の文学修行とした。しかし意外なことに、20 代のころからヘミングウェイに入れ込んでいたはずのエリソンはその後、ヘミングウェイ評価において極端な転回を示す。1946 年にほぼ完成しながら 53 年まで出版されることのなかったエッセイ、“Twentieth-Century Fiction and the Black Mask of Humanity”でエリソンはヘミングウェイの芸術至上主義的なテクニク偏重を槍玉に挙げ、人種差別が代表するような社会問題を直視しない姿勢を酷評する。しかし比較の間を置かずしてヘミングウェイの文体を積極的に評価する方向に転じ、1963-64 年に出版された“The World and the Jug”にいたっては、ヘミングウェイ作品にアフリカ系アメリカ人の文化伝統の響きを指摘する。

このヘミングウェイ評価の好転と歩調を合わせるかのようにして、単なる文体という

次元にとどまらないスタイル論が繰り広げられていくことになるものの、ホックマンや Robert O'Meally の先行研究においては、エリソンの後年のヘミングウェイ評価の転回/展開に未説明の部分が多い。

エリソンが改めてヘミングウェイを自身の文学上の祖として規定していく過程と、エリソンのスタイル論の進化/深化は、後者が人種横断的なアメリカ文化・文学の生成・発展のダイナミズムを示していくまさにその符合において、切っても切り離せない。本研究は、この点に切り込んでいくものである。

2. 研究の目的

本研究は、アフリカ系アメリカ人作家・知識人 Ralph Ellison と 20 世紀を代表するアメリカ人作家 Ernest Hemingway を、スタイル論という支点において交叉させて読み直しを行っていく。アーカイヴ調査によって、エリソンのエッセイ群におけるヘミングウェイ評価の転向と軸を一つにした文学スタイルの概念の変遷をたどりながら、アメリカ文学史における人種越境的なダイナミズムが言語化される現場、瞬間を歴史化しつつ実証的に検証していく。

3. 研究の方法

(1) Kenneth Burke やエリソンの友人で黒人音楽や文化に関する評論を発表する Albert Murray といったエリソンの周囲にいた文学者・知識人との関係を先行研究によって探る。また、エリソンを含めたこうした文学者・知識人たちの一次資料を読みながら、彼らの使用においてスタイルに類似した概念や用語、例えば idiom や vernacular をリストアップする。

(2) 出版されたエッセイをふまえたアーカイヴ調査によってエリソンの文学論・文化論を個々の事例に即してたどり、その変化の節目を見極める。

4. 研究成果

(1) 平成 28 年 3 月に米国議会図書館に赴き、エリソンのアーカイヴ調査を行った。ヘミングウェイに関する未発表のエッセイについて調査を行った他、ヘミングウェイにまつわる資料やエリソンとバークの書簡の一部の閲覧、複写を行った。この際、『誰がために鐘は鳴る』(1940) のゲリラたちの語りをエリソンがタイプしなおした紙片を発見したことから同作品に注目し、ヘミングウェイとエリソンの接点における重要な時代区分としてこの作品が執筆された 1930 年代に着目するにいたった。

(2) 平成 28-29 年度には、27 年度のアーカイヴ調査や文献調査に基づく着想から、1930 年代アメリカ文化を背景にしたエリソンとヘミングウェイの接点を探った。また、1930

年代以降のアメリカ文化を大局的に見据えた以下を含む重要な先行研究をひもといた: 恐慌後の1930年代や40年代のアメリカ、左翼的な労働者団体が影響力を行使していた時代にそれら労働者団体と結びついた左派の知識人、文化人たちの運動や活動を包括的に検証した Michael Denning, *The Cultural Front: The Laboring of American Culture in the Twentieth Century* (1997); 30年代アメリカ文化の理論的意味づけを行い、デニングの研究を補完する宮本陽一郎『モダンの黄昏 帝国主義の改体とポストモダニズムの生成』(2002年); ファシズム台頭やソ連内外の共産主義イデオロギーの変遷という世界的背景に位置づけてニューヨークの左派知識人たちの動向を詳細にたどった秋元秀紀『ニューヨーク知識人の源流 1930年代の政治と文学』(2001年)。

特にデニングの著作をヒントに、エリソンの未発表短編作品である「広場でのパーティー」とヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』におけるリンチというテーマや設定の類似性に着目し、反リンチ運動がニューディール期の左派文化の中核的メッセージであることをふまえて研究を進め、スペインを舞台にしたヘミングウェイの長編が実はアメリカのニューディール期の文化的関心を多分に反映している可能性の検証を行った。あわせて宮本の先行研究を発展させ、『誰がために鐘は鳴る』のスペインのゲリラ部隊員たちの描写に、アメリカにおける民衆の発見とその文化的表象という30年代的背景がある可能性を探求した。こうして、一見したところ全く無関係なアメリカ黒人のヴァナキュラーな特色が『誰がために鐘は鳴る』に見て取れることを検討するにいたった。こうした点を27-28年度の一連の学会発表、The XVIIth Biennial International Ernest Hemingway Conferenceにおける“*What Is American about For Whom the Bell Tolls?: Ralph Ellison, the Cultural Front, and the Vernacular*”と日本ヘミングウェイ協会第27回全国大会シンポジウム「ヘミングウェイの言葉と白人/黒人・異邦人」における、「ヘミングウェイのヴァナキュラー・スタイル

『誰がために鐘は鳴る』、人種、WPA」を通じて深めていき、最終的に論文、「ヘミングウェイのヴァナキュラー・スタイル 『誰がために鐘は鳴る』、人種、WPA」としてまとめた。

その後、30年代とヘミングウェイの関係をさらに探るなか、ヘミングウェイの三番目の妻である Martha Gellhorn に着目することとなった。ゲルホーンがヘミングウェイのスペイン内戦の取材旅行に同行したことは周知の事実である。しかし、彼女がほかならぬニューディール政策の調査エージェントとしての経験を持ち、その活動を基に、不況にあえぐ個人を半フィクション的に描いた *The Trouble I've Seen* と題された本を出版して

いることは、ヘミングウェイ研究においてほとんど無視されてきた。彼女がヘミングウェイに出会うのは同書が出版された直後、1936年暮のことである。さらにヘミングウェイは、二人の関係が修復不可能となった1944年においても、彼女が民衆(people)の描写に優れた書き手であることを公言してはばからない。こうした、ヘミングウェイ研究において見過ごされてきた様々な点を線で結ぶことで、『誰がために鐘は鳴る』を通してゲルホーンの姿が透かし見えてくることを確信し、これについて今年7月に開催される Hemingway Society の国際学会で研究発表を行う予定である。

以上はヘミングウェイにまつわる成果報告になるが、ラルフ・エリソンについての成果報告も予定している。今年10月に開催予定の日本アメリカ文学学会全国大会において、エリソンのスタイルに対する理解の深化は彼の修業時代 ほとんど写経するようにヘミングウェイのテキストに没頭していた1930年代 にあった旨、アーカイヴ調査の成果をもとに報告を行う予定である。

(3) 1930年代の文化背景とヘミングウェイ作品をつなげて論じた視点を発展させ、その後のヘミングウェイ作品を歴史化して読み解く可能性を感じている。従来のヘミングウェイ研究では、特にその文学的価値については1920年代の作家修行時期に焦点があてられてきた。Mark Twain 由来の口語的な文学言語を Gertrude Stein らモダニストの影響のもと発展させた、ヘミングウェイの簡潔で平易ながら詩情あふれる文体が、第一次大戦後の荒涼たる世界と若者のすさんだ精神状態を極めてモダンに描くことに成功したとの見識である。セールス的にも批評的にも芳しくないヘミングウェイの後の文学作品が、こうした初期の文学作品の美学的水準に達していないのは明らかである。

私もおおむねこの見方に同意し、特に『河を渡って木立の中へ』(1950)はヘミングウェイの存命中に出版された長編で最も完成度が低い作品と考える。しかし、従来の観点は、この小説の後に出版された『老人と海』(1952)においてヘミングウェイがある種「復活」を示したその足取りを正しく評価するに事欠く。その意味で、30年代以降のヘミングウェイ作品の文体的、ナラティブの実験を再評価する私の視座は可能性を秘めると考えられる。つまり、『誰がために鐘は鳴る』においてヘミングウェイは、自身の分身と思しき白人男性の視点以外にスペイン人ゲリラたちの内面に潜り込んで彼らに個人史を語らせるという大胆な実験 これはまさしくニューディール期の作家、芸術家たちが民衆を彼らと同じ高さの目線から描出しようとした試みに通じる に着手し、それが完成を見たのが貧しきキューバ人漁夫サンチャゴを主人公とする『老人と海』であると

のように再評価できるのではないか。この見立てはヘミングウェイ研究の前提を根底から覆すものではないとしても、中後期ヘミングウェイ文学の軌跡をより精緻に評価するための重要な補助線を提供しうると考えられる。このように、中後期ヘミングウェイ文学の美学的側面の評価を刷新しうる可能性をひめる研究の準備を進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

辻 秀雄、「ヘミングウェイのヴァナキュラー・スタイル 『誰がために鐘は鳴る』、人種、WPA」、『ヘミングウェイ研究』、査読有、第18号、2017、43-52

[学会発表](計2件)

辻 秀雄、「ヘミングウェイのヴァナキュラー・スタイル 『誰がために鐘は鳴る』、人種、WPA」、『日本ヘミングウェイ協会第27回全国大会シンポジウム「ヘミングウェイの言葉と白人/黒人・異邦人」』、2016.11.19、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス(兵庫県)

辻 秀雄、「What Is American about *For Whom the Bell Tolls*?: Ralph Ellison, the Cultural Front, and the Vernacular」、The XVIIth Biennial International Ernest Hemingway Conference、2016.7.21、リバーフォレスト(アメリカ合衆国)

[図書](計1件)

越 森彦、辻 秀雄、その他、弘学社、『アウリオン叢書 15 文学と悪』2015、157(123-33)

6. 研究組織

(1)研究代表者

辻 秀雄 (TSUJI, Hideo)

首都大学東京人文科学研究科・准教授

研究者番号：70571892

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし